

日本學報 第44輯 別冊
2000年 6月 pp.69~84

日本語動詞習得の中間言語研究

森山新

韓國日本學會

日本語動詞習得の中間言語研究

森山 新*
morishin@kunja.sejong.ac.kr

<要 旨>

本研究は韓国語を母語とする日本語学習者の動詞習得について、ル形とマス形の習得過程に現れる中間言語を横断的調査に基づいて実験的に研究したものである。

実験はソウルにある2つの大学で日本語を学ぶ学生を対象にして、口頭により動詞のル形、マス形を発話させて行った。

動詞習得においては語彙カテゴリーや文法カテゴリー形成の不完全が語彙的な混同や活用変形の過般化などの中間言語を引き起している。また動詞の語彙習得と活用変形規則の習得とはどちらが先とは言い難く、むしろ同時並行的になされているようであり、動詞習得は語彙習得と活用変形規則習得が相互に補完しあいながらより完全な習得へと向かっているように見える。また脳内には活用変形規則だけでなく、可能な限りさまざまな活用形も記憶されており、動詞活用は記憶内にあるル形やマス形がそのまま発話されることもあれば、活用変形規則から作り出される場合もあるようである。その意味から言語習得過程は最小主義的(生得主義の立場)なものとするよりは最大主義的(認知主義の立場: Langacker 1988など)なプロセスであるように思われる。

1. はじめに

言語習得研究の歴史において、1950年代までのアメリカを中心とした構造主義的立場では、学習者言語の誤りの主たる原因は母語の転移(transfer)であるとされていた。ところが1970年代の英語教育を中心とした第二言語習得研究の結果、母語の転移による誤りが誤り全体に占める割合は、最低3%から最大51%とされ、母語の転移が決して誤りの主たる原因ではないことが明らかになった。

一方、第二言語習得研究の広がりの中、Selinker(1969, 1972)によって初めて打ち出された中間言語(interlanguage)の概念は、それまで否定的に見つめられがちであった学習者言語における誤りを肯定的に見つめ、学習者が言語規則においても、またその運用にあたっては、母語とも目標言語とも異なる、独自の体系性を持っていることが強調された。

本稿では韓国語母語話者の日本語学習者が、動詞を習得するにあたり、どのような中間言語体系を用いているのか、その特徴や原因を明らかにすることを通して、その背後に潜む習得のメカニズムについて考察する。最後に生得主義が主張する立場(最小主義)と、これに対立するLangacker(1988)による認知主義的な立場(最大主義)とを検証する。

2. 先行研究

第二言語習得研究は歴史の浅い研究分野である。とりわけ第二言語としての日本語習得研究は1990年以降に始まったといっても過言ではない。したがって日本語習得にあたっての中間言語についての実験的研究、特に本稿において扱おうとしている動詞習得に関する先行研究はあまり多くない。

Banno & Komori(1989)は、日本語の動詞活用形の文法形態素の習得順序を扱っているが、これはDulay & Burt(1973)の研究方法を応用し、名古屋大学で日本語を学ぶ外国人22名を被験者として、正用順序(accuracy order)により日本語形態素の習得順序を提示したものである。

また長友(1997)では英語を母語とする日本語学習者を対象に、動詞テ形の音韻規則の習得順序について縦断的な調査を実施、言語普遍性との関係からそのメカニズムが論じられている。

また森山(1999a, 1999c)は韓国語を母語とする日本語学習者の日本語動詞活用形の文法形態素の習得順序を縦断的・横断的に研究している。

これらは主に日本語の動詞活用形の習得順序を扱ったものであり、その中間言語形成のプロセスやメカニズムを扱ったものとしては、本稿の直接の先行研究となっている森山(1999c)がある。

また本稿で最後に言及することになる生得主義が主張する最小主義の立場と、これに対立するLangacker(1988)らの認知主義的な最大主義の立場について簡単に紹介しておく。¹⁾

例えば英語の複数形を表出する場合を例にして説明すると、dogs, trees, toes, pins, bells, walls, eyesといった複数表現は、複数形を作り出す規則にdog, tree, toe, pin, bell, wall, eyeといった語彙が投入されることによって作り出され、dogs, trees, toesのような個別の複数形のリストは除去されると考える。その結果脳内に習得されたものは余剰性を持たない最小の規則と語彙のみとなる。これが最小主義である。

一方Langackerの認知文法では、使用に基づいたモデル(Usage-based model)を打ち出し、頻繁に用いるものは単位(unit)としての地位を与えられるとする。複数形の例でいえば、複数形を作り出す規則や、dog, tree, toeなどの語彙のほか、頻繁に用いられる複数形までもが単位の地位を得ると考えるのである。したがって脳内に習得されたものは余剰性を持ち、規則や語彙のみならず、複数形の一部までもが常に記憶されるというように、人間の能力が許す限り多くのものが習得され、記憶されるということとなる。これが最大主義の立場である。

3. 調査の方法

本稿では動詞習得の中間言語の類型をル形、マス形を中心に調べる。調査は森山(1999a)の調査1や森山(1999c)の横断の実験のうちの調査2と同一のものを再分析した。

本研究がル形とマス形を中心として行われるのには理由がある。それはこれまでの日本語の入門教科書が、動詞活用の原形や教科書の動詞初出形を何形にするか、さらには新出語彙リストへ動詞を

1) 詳しくはLangacker(1988)などを参照されたい。本稿でもこれに基づいた説明を行う。

掲載する際に何形を掲載するかにおいて、ル形とマス形とが対立の構図を示しているからである。活用の原形や教科書の初出形、語彙リストへの掲載形といったものは、実際の言語習得過程や認知プロセスなどとの関係を考慮して決定されるべきであり、その意味から動詞の中間言語研究の中で、時にル形とマス形の中間言語を研究することは教材製作などに直結する重要な問題であると考えられる。²⁾

調査は正規の大学の授業とは別に時間を設けて1人ずつ実施した。動詞は以下の基本動詞68個を描いた絵カードを用いた。絵カードは活用のタイプや語尾、長さなどが等しくなるように、動詞を34個ずつIグループとIIグループに二分する。

Iグループ: 起きる 飲む 洗う 磨く 履く 着る 来る 行く 乗る 降りる 帰る 脱ぐ 見る 書く
話す 習う できる 働く 遊ぶ 勤める 住む 走る 立つ 登る 太る 瘦せる なる
言う 泣く 捨てる 送る 買う 待つ 死ぬ

IIグループ: 食べる 読む 歌う 歩く 着く 出る(勉強)する 置く 撮る 教える 入る 泳ぐ 寝る
聞く 押す 思う あげる 弾く 飛ぶ 生まれる 休む 切る 打つ 座る 叱る 替める
降る 吸う 咲く 過ぎる 作る 会う 持つ 呼ぶ

24名中半数の被験者に対しては、Iグループの動詞に関しては「ル形→マス形」の順で答えさせ、IIグループの動詞に関しては「マス形→ル形」の順で答えさせる。実験の信頼性を高めるため、残り半数の被験者に対してはこれとは逆に、Iグループの動詞に関しては「マス形→ル形」の順で、IIグループの動詞は「ル形→マス形」の順で答えてもらう。「ル形→マス形」の順で答える場合と、「マス形→ル形」で答える場合の時間を測定する。調査の結果はすべて録音し、それぞれにかかった時間も測定する。

調査が終わった時点で、被験者に「ル形→マス形」の順で答えるのと、「マス形→ル形」の順で答えるのとどちらが易しいか質問する。

調査は1998年5月に実施したものである。調査の対象は動詞活用にある程度慣れてきたと思われる2、3年生で、A大学では「中級日会話1」を受講していた2年生9人、3年生5人、B大学は2年生10人であった。

なお、動詞活用形の中間言語は、語彙的なものと形態的なものに分けて分析した。

語彙的な中間言語とは、語彙自体の習得が不完全なことから生じる誤りを含むものであり、誤りの起きる範囲が語尾だけでなく語幹など語彙全体に及んでいる。例えば以下のような中間言語を指す(カッコ内が正答)。

大きい(太る)、よむ(飲む)、やすい(瘦せる)、生きる(生まれる)、出す(出る)

また形態的中間言語とは活用語尾の接続に関する誤りを含むものであり、誤りは基本的に語幹と語尾の連結部分に起きる。語幹と語尾の連結部分とは以下の下線部分である。

kak-a-na(i) tabe-__na(i)

2) 森山(1999a)の「3. 動詞活用形に関する教科書調査」、または森山(1999b)第II部第4章を参照のこと。

kak- <u>i</u> -mas(u)	tabe- <u>_</u> -mas(u)
kak- <u>u</u> -(. /desyo)	tabe- <u>r-u</u> -(. /desyo)
kak- <u>u</u> -(noun)	tabe- <u>r-u</u> -(noun)
kak- <u>e</u> -ba	tabe- <u>r-e</u> -ba
kak- <u>o</u> -u	tabe- <u>yo</u> -u
ka- <u>i</u> -te	tabe- <u>_</u> -te

具体的には以下のような誤りをさす。

瘦せります(瘦せます)、書きます(書きます)、言わります(言います)、泳げります(泳ぎます)

また学習者の中間言語においては、動詞の活用の種類や変形規則が目標言語のそれと異なることが往々にしてある。その場合には語幹と語尾の境界自体も変わってしまうが、これらも形態的な中間言語に含めた。例えば以下のようなものである。

つきります(作ります)、飲みる(飲む)、話する(話す)、降(お)る(降りる)

4. 調査の結果

表1は各被験者のル形・マス形の誤り数、ル形・マス形の正答率の比較、「ル形→マス形」と「マス形→ル形」の発話時間と両者間の速度の比較、「ル形→マス形」の順で答えるのと「マス形→ル形」の順で答えるのとどちらが易しいかについての設問調査の結果などをまとめたものである。これを見るとわかるように、ほとんどの学習者ではル形のほうがマス形より正答率が高く、またル形をもとにマス形を作り出すほうがマス形をもとにル形を作り出すよりも容易であることがわかるであろう。³⁾

また表2は、具体的な動詞活用形の中間言語形態を類型別に区分したものである。また表3は、被験者別に誤りを「ル形のみ誤ったもの」「マス形のみ誤ったもの」「両方誤ったもの」にわけ、各被験者が何形を活用の原形にしているのかを推測したものである。

3) 詳細については森山(1999a)の調査1、または森山(1999b)の横断的実験の調査2を参照のこと。

表1 ル形・マス形の発話調査の結果

大学	被験者		誤り数		正答数の比較	両動詞グループの発話所要時間				難易度設問調査	
			ル形 (個)	マス形 (個)		発話速度		ル→マス が速い	マス→ル が速い	ル→マス が易しい	マス→ル が易しい
	No.	学年/性				ル→マス (秒)	マス→ル (秒)				
A	01	3年女	3.0	3.5	ル>マス	91	96	○		○	
	02	2年女	4.5	3.0	マス>ル	75	98	○		○	
	03	2年女	15.0	20.5	ル>マス	112	145	○		○	
	04	3年男	44.0	44.5	ル>マス	167	179	○		○	
	05	2年男	28.0	33.0	ル>マス	142	138		○		○
	06	2年男	26.0	29.5	ル>マス	157	164	○		○	
	07	2年女	22.5	27.0	ル>マス	111	134	○		○	
	08	3年男	39.0	41.5	ル>マス	150	165	○		○	
	09	3年女	5.5	6.0	ル>マス	91	96	○		○	
	10	2年男	2.0	4.0	ル>マス	103	128	○		○	
	11	2年女	16.0	19.5	ル>マス	108	154	○		○	
	12	2年女	2.5	5.5	ル>マス	103	144	○		○	
	13	3年女	10.0	13.5	ル>マス	122	152	○		○	
	14	2年女	39.0	41.5	ル>マス	146	160	○		○	
B	01	2年女	17.0	12.5	マス>ル	112	132	○		○	
	02	2年女	10.0	14.0	ル>マス	105	111	○		○	
	03	2年女	21.5	21.5	ル=マス	119	132	○		○	
	04	2年女	17.0	18.5	ル>マス	98	113	○		○	
	05	2年女	13.0	13.5	ル>マス	134	159	○		○	
	06	2年女	7.5	7.5	ル=マス	104	115	○		○	
	07	2年女	8.0	11.5	ル>マス	110	101		○	○	○
	08	2年女	17.0	17.5	ル>マス	101	120	○		○	
	09	2年女	11.0	11.0	ル=マス	93	99	○		○	
	10	2年女	6.0	10.5	ル>マス	104	116	○		○	

註1) 難易度の設問調査で、両方に○があるのは、「難易度が同じ」という意味である。

註2) 「誤り数」で言い換えは0.5を加算した。

まず表2を見ると、まずル形・マス形のうち、一方だけが間違っただけのもの、ル形が18例、マス形が56例で、マス形だけが間違っただけのほうが多い。マス形だけを間違っただけの大部分、頭の中にル形が記憶され、それを原形にしてマス形を作り出そうとした際に誤りを犯したと思われる。またル形だけを間違っただけの逆で、マス形が脳内に記憶され、それをもとにル形を作り出そうとして誤りを犯したものが大部分であろう。このことから学習者が脳内に記憶する形はマス形よりル形のほうが多いと推測できる。このことは表3を見ても、「マス形のみ誤り」が見られる被験者(これはル形を活用の原形としていると推測される被験者)数が多く、一方「ル形のみ誤り」が見られる被験者(これはマス形を活用の原形としていると推測される被験者)数は1名に留まっていることにも現れている。ただしここで、同一の学習者でありながらある動詞はル形からマス形を作り出し、別の動詞ではマス形からル形を作り出すことも十分あり得る。これは表3で「ル形のみ誤り」と「マス形のみ誤り」の双方を持ち合わせている学習者が相当数存在することにより示されている。

表2 中間言語形態の類型区分

		区分	表出数	具体的中間言語形態
一方だけ違ったもの	マス形だけ	5段動詞過般化	24	着ります(着ます)4、瘦せります(瘦せます)6、替めます(替めます)3、あげります(あげます)、過ぎります(過ぎます)、起きります(起きます)2、降りります(降ります)、できります(できます)2、勤めます(勤めます)、食べります(食べます)、捨てります(捨てます)、出ります(出ます)
		1段動詞過般化	7	切ります(切ります)4、はします(走ります)、撮ります(撮ります)、のめます(乗ります)
		動詞乗り換え型	8	きます(着ます)、きます(切ります)、よみます(呼びます)、なります(泣く)、のります(登ります)、きます(聞きます)2、します(住みます)
		テ形過般化	5	書います(書きます)、働きます(働きます)、死みます(死にます)、聞きます(聞きます)、泳ぎます(泳ぎます)
		ナイ形過般化	1	言わります(言います)
		ル形過般化	1	過ぎります(過ぎます)
		可能形過般化	4	泳げります(泳ぎます)、飛べります(飛びます)、言えます(言います)、待てります(待ちます)
	その他	6	おきます(送ります)、生まえます(生まれます)、ぬかみます(脱ぎます)、います(言います)3	
	ル形だけ	5段動詞過般化	7	つとむ(勤める)2、うまる(生まれる)、おる(降りる)3、すぐ(過ぎる)
		1段動詞過般化	2	飲む(飲む)2
		変格動詞過般化	1	話す(話す)
		動詞乗り換え型	5	きる(聞く)、のむ(乗る)、きる(切る)、つく(作る)、きる(着る)
		その他	3	叱う(叱る)、しむ(死ぬ)、つく(作る)
両方違ったもの	意味的混同	12	働く(勤める)2、うつ(弾く)2、替める(叱る)2、届く(送る)、脱ぐ(履く)、勤める(働く)、考える(思う)、登る(降りる)、過ごす(過ぎる)	
	形態的混同	26	つく(履く)、洗う(歩く)、買う(会う)、聞く(書く)、ひく(履く)、買う(歌う)、たつ(打つ)、たつ(持つ)、笑う(洗う)、聞く(着る)、買う(歌う)、聞く(着く)、おる(置く)、おす(送る)、急ぐ(遊ぶ)、走る(入る)、及ぶ(泳ぐ)、とる(飛ぶ)、つける(作る)、きる(聞く)、聞く(来る)、買う(書く)、吸う(住む)、習う(なる)、買う(吸う)、よる(呼ぶ)	
	同じ漢字を使う単語との混同	9	つく(着る)3、ふる(降りる)2、きる(着く)2、おる(降る)、おる(降る)	
	活用形のまちがい	2	住んでます(住みます)、太っています(太ります)	
	動詞の一部が間違っただけのもの	14	ふく(履く)2、うまう(生まれる)、すぐ(吸う)、ほふ(呼ぶ)、とす(押す)、すわす(座る)、まる(生まれる)、あらふ(洗う)、おくえる(教える)、やする(瘦せる)、ひかく(磨く)、とつ(撮る)、おしる(押す)	
	その他	10	話す(できる)、出る(立つ)、飛ぶ(着く)、咲く(買う)、出る(待つ)、作る(着る)、かける(働く)、ちかく(勤める)、ひらう(捨てる)、とむ(持つ)	
無回答(覚えていない)	278			

註)カッコ()内が正答を示す。数字は表出回数を示す。

これは、学習者が記憶する形態、すなわち記憶形はル形である場合が多いとしても、教科書や授業に出たそのままの形(その多くはマス形であろう)で記憶することもあり得るからである。このようにマス形が記憶されている動詞の場合には、原則的にはル形を記憶形や活用の原形としている学習者であっても「マス形→ル形」の変形をせざるを得なくなる。

ル形・マス形を表出する際の中間言語には、以下に示すようにいくつかの類型が見られる。これは大

表3 誤りの分布と推測される活用原形

	被験者	ル形のみ誤り	マス形のみ誤り	両方誤り	推測される活用原形		
					ル形	マス形	不明
A	01	1.5	2.0	1.5			○
	02	2.5	1.0	2.0			○
	03	0.0	5.0	15.0	○		
	04	1.0	2.0	43.0			○
	05	2.0	7.0	26.0			○
	06	0.0	3.5	26.0	○		
	07	0.0	4.5	22.5	○		
	08	0.0	2.5	39.0	○		
	09	2.5	3.0	3.0			○
	10	0.0	2.0	2.0	○		
	11	0.0	3.5	16.0	○		
	12	1.0	3.0	2.0			○
	13	1.0	4.5	9.0			○
	14	0.0	2.5	39.0	○		
B	01	4.5	0.0	12.5		○	
	02	0.0	4.0	10.0	○		
	03	3.0	3.0	18.5			○
	04	1.0	2.5	16.0			○
	05	0.0	0.5	13.0	○		
	06	1.5	1.5	6.0			○
	07	0.0	3.5	8.0	○		
	08	0.5	1.0	16.5			○
	09	0.0	0.0	11.0			
	10	0.0	4.5	6.0	○		
	total	22.0	66.5	363.5	11	1	11

部分語幹と語尾の連結部に誤りが生じる形態的な中間言語と語彙全体に誤りが広がる語彙的な中間言語に属するものである。ここではまず、「マス形のみが違ったもの」、「ル形のみが違ったもの」、そして「両方違ったもの」に分けてその原因を考えることにする。このうち「マス形のみが違ったもの」と「ル形のみが違ったもの」とは以下で詳しく説明するように形態的な中間言語に属するものが多く、「両方違ったもの」は語彙的な中間言語に属するものが多いと考えられる。

4.1 マス形のみが違ったもの

(1) 動詞の種類を誤った過般化

① 5段動詞の過般化(24例)：これに属するものはすべて1段動詞を「る」で終わる5段動詞のように考えてマス形を作り出したものである。

例) 太る→ふとります(5段)

瘦せる→*やせります(1段)

② 1 段動詞の過般化(7 例) : これに属する多くが「る」で終わる 5 段動詞を 1 段動詞のように考え、マス形を作り出したものである。特に例外 5 段動詞に誤りが多い(7 例中 5 例)。

例) 着る→きます(1 段)
切る→*きます(5 段)

(2) 動詞を乗り換えた誤り(8 例) : ル形からマス形を作る際に別の似た動詞のマス形に乗り移ってしまった誤りである。これは動詞の原形に活用変形の規則を適用する過程において、本来の動詞(下に挙げた例では「着る」)のマス形に似た別の動詞のマス形(ここでは「聞く」のマス形「聞きます」)が本来の動詞のマス形(ここでは「着ます」)よりも記憶上より際立っているために乗り換えが起こったものと考えられる。

例) 着る→きます
聞く→きます
着る→*きます

(3) 活用形の過般化 : マス形を作る際の語尾変化をほかの活用形と間違えたもの。

① テ形過般化(5 例) : すべて 5 段動詞の音便形を用いてしまった誤りである。

例) 書く→かいて
書く→*かいます

② ナイ形過般化(1 例) : 5 段動詞のマス形(-i-)をナイ形(-a-)のように変形したものである。

例) 言う→いわない
言う→*いわます

③ ル形過般化(1 例) : マス形を作る際にル形にそのままマスをつけたものである。

例) 過ぎる→すぎます
過ぎる→*すぎます

④ 可能形過般化(4 例) : これに属するものはすべて 5 段動詞の可能形のマス形(-e-)を答えたものである。

例) 泳ぐ→およぎます
泳げる→およげます
泳ぐ→*およげます

4.2 ル形のみが違ったもの

(1) 動詞の種類を誤った過般化

① 5段動詞の過般化(7例)：1段動詞のマス直前を5段動詞のようにウ段にかえてル形を作ったもの。

例) つつみます→つつむ(5段)
つとめます→*つとむ(1段)

② 1段動詞の過般化(2例)：5段動詞を1段動詞のように考え、マスの代わりにルをつけてル形を作り出したものである。

例) 見ます→みる(1段)
飲みます→*のみる(5段)

③ 変格動詞の過般化(1例)：「話します」をスル動詞と考えたものである。

例) します→する
話します→*はなする

(2)動詞を乗り換えたもの(5例)：マス形からル形を作る際に別の似た動詞のル形に乗り移ってしまったと思われるものである。これもさまざまな原因が関わっていると考えられる⁴⁾が、何よりも4.1.(2)と同様、動詞の記憶形に活用変形の規則を適用する過程において、本来の動詞(下に挙げた例では「飲みます」)のル形に似た別の動詞のル形(ここでは「乗る」)が本来の動詞のル形(ここでは「飲む」)よりも記憶上より際立っているためにこうした乗り換えが誘発されたものと考えられる。

例) 飲みます→のむ
乗ります→のる
飲みます→*のる

(3) その他：ルの代わりにウをつけたり、スをつけたりしたものである。

例) 会います→あう
叱ります→*しかう

4)例えば日本語の動詞のル形は「ル」で終わることが多いために、安易に「ル」をつけてしまうなどの原因が考えられる。

4.3 両方違ったもの

記憶が不正確で記憶形自体が違っており、それを原形にして他の活用形を作ったもので、中間言語が単に活用のさせ方に違いがあるのではなく、語彙の習得が不完全なために起こる語彙的誤りが大部分である。以下のような類型に分けられる。

(1) 何らかの面で似た動詞との錯覚が生じたもの

① 意味的混同(11例)：類義語や反義語、自動詞・他動詞の対など、意味的に何らかの共通項があり、混同が生じたと思われる。

例) 「働く」と「勤める」(類義語)
「替める」と「叱る」(反義語)
「過ぎる」と「過ごす」(自・他)

② 形態的混同(26例)：発音が一部似ているなど、形態的類似により混同が生じたもの。

例) 「洗う」と「歩く」(語頭が同じ)
「買う」と「会う」(語末が同じ)
「遊ぶ」と「急ぐ」(語中が同じ)

③ 漢字が同じもの(9例)：漢字が同じことから混同が生じたもの。

例) 「着く」と「着る」
「降る」と「降りる」

(2) 単に記憶が不正確なもの

① 動詞の一部が違ったもの(15例)：記憶途上にあるものと思われる。

例)*おくえる(教える)、*すわす(座る)

② 動詞の全体が間違っただもの(9例)：本来の動詞自体をまだよく知らない段階であると思われるものや、上記の2つ以上の原因が重なり合ったもの。

例)*ひらう(捨てる)：「捨てる」の反義語「ひろう」の一部が間違っただもの

5. 結果の分析

このように動詞活用形の中間言語は語彙自体をまだ正確に記憶できていない語彙的な中間言語

(語彙的誤り)と、動詞のル形または何らかの活用形を記憶はしているが、それを用いて必要な活用形を作り出す活用変形の段階で誤りが生じる形態的な中間言語(形態的誤り)とに分けられる。それぞれは以下のように不完全な習得、混同、過般化などが原因となっている。

<語彙的中间言語(語彙的誤り)>

- ① 動詞自体の記憶が不完全なもの
- ② 形態的に似た動詞との混同
- ③ 意味的に似た動詞との混同
- ④ 漢字が同じ動詞間の混同

<形態的中间言語(形態的誤り)>

- ① 動詞の種類による過般化
- ② 活用形間の混同による過般化
- ③ 形が似た動詞間の混同が原因のもの

初級レベルの学習者のこうした中間言語(誤り)は、認知上のさまざまな要因、すなわちカテゴリー形成や意味と形式との対応関係といったものが未だ十分でないことによるものである。語彙的な中間言語では、カテゴリー形成の中でも各動詞の語彙カテゴリー形成が不完全なため、意味から形式への変換過程で、何らかの類似性を持つ語彙間での混同が起きやすくなっていると解釈できる。また形態的な中間言語では、動詞の種類や活用形といったメタ言語的な文法カテゴリー形成が不完全なため、動詞の種類や活用形の間での過般化が起きたり、活用形を作る過程において、形が似た動詞間で乗り換えが行われてしまうのであると推測される。

また母語の役割について一言触れれば、これらの中間言語形態に母語が何らかの形で関わっている形跡はほとんど見出されない。強いて挙げれば、「呼ぶ」「歌う」を韓国語での漢字発音「呼(호)」「歌(가)」の影響を受け「ほぶ」「かう」としたもののぐらいい限られている。

6. 中間言語形成のメカニズム

最後に動詞習得の中間言語をもとに、言語習得が生得主義の主張するように最小主義的に行われているのか、それともLangacker(1988)などの認知主義が主張するように最大主義的に行われているのかを考えてみたい。

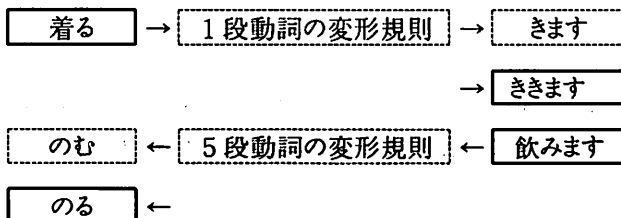
再度表3を見ていただきたい。まず24人の被験者の誤りを見渡すと、「ル形のみ誤り」や「マス形のみ誤り」が多く「両方誤り」が少ない被験者と、逆に「ル形のみ誤り」や「マス形のみ誤り」が少なく「両方誤り」が多い被験者とに分けられる。前者の被験者としてはA大学の01、02、09、12などが挙げられる。一方後者の被験者としてはA大学の03、04、05、06、07、08、11、14、B大学の03、04、05、08、

09などが挙げられる。前者は語彙習得は進んでいるが、活用形の変形に問題を残している被験者であり、後者は活用形の変形よりは語彙習得に問題を多く残している被験者である。

また活用変形の原形を推測してみると、ル形を活用の原形としていると推測される被験者が11名、マス形を活用の原形としていると推測される被験者が1名、どちらを原形としているとは言い難い被験者が11名となっている。⁵⁾このことから活用の原形はル形であることが多いことは確かなようであるが、必ずしもル形ではなく、状況や動詞、さらには学習者に依りて異なっているようである。

また動詞の中間言語を見ると、記憶されている活用形(その多くはル形)を原形とし、もう一つの活用形は記憶にないため、変形規則の適用によってこれを作り出す場合が多いが、その一方で動詞を乗り換えた誤りもかなり見られる。4.1(2)や4.2(2)がそれである。これらは上述したように記憶されている活用形を原形として、ここから必要な活用形(ここでは「ル形」または「マス形」)を作り出す際に、活用の変形規則を誤って適用したことも原因であろうが、形態(音韻)的に似ているもののうち、記憶上際立っているものが先に呼び起こされ、発話されてしまったものとも考えられる。例えば「着る→*ききます」といった変形の誤りは、1段動詞の変形規則の適用を誤ったことも原因の一つであるが、同時に「着る」のマス形を考え出す過程で「きます」よりは「聞く」のマス形「ききます」がより際立って記憶されており、これが形態(音韻)的な類似性により呼び起こされて発話に影響を及ぼしたとも考えられる。だとすればこの場合、学習者の記憶にはル形の「着る」、「聞く」のマス形「ききます」がより確かに記憶されていて、「着る」のマス形「着ます」やマス形への変形規則(この場合1段動詞の変形規則)は記憶が確かでないということになる。同様に「飲みます→*のる」も5段動詞の活用変形規則の適用を誤ったことも原因の一つとして考えられるが、同時に「飲みます」のル形を考え出す過程で「のむ」よりは「乗る」がより際立って記憶されていて、これが形態(音韻)的な類似性により呼び起こされて発話に影響を及ぼした可能性も高い。そうすると学習者が確かに記憶しているのは、マス形の「飲みます」、ル形の「乗る」であり、「飲む」や5段動詞の変形規則などの記憶はそれらに比べれば確かではないということになる。これらを図1に示した。太線で囲ったものは記憶が確かで際立っているもの、点線で囲ったものは、記憶が確かでないものを示している。

<図1> 「着る→*ききます」「飲みます→*のる」のモデル



5) B大学の被験者09は、「マス形のみ誤り」も「ル形のみ誤り」もなく、また表1において「ル形→マス形」「マス形→ル形」の時間はほぼ同じなどから、ル形からマス形への変形もマス形からル形への変形も相当に自動化されているか、両活用形が記憶されているものと思われる。

つまり必ずしも学習者は活用の原形としての語彙(例えばル形)と変形規則(例えばル形からマス形への変形規則)だけを記憶しているのではなく、語彙としてはル形とマス形、そして規則としてはル形からマス形への変形規則を記憶している可能性がある。この場合、記憶は最小的ではなく余剰的なものとなっている。また習得の順序としてはこの場合、変形規則の習得がやや遅れ、実例として個々の動詞のル形やマス形が個別に習得されており、語彙習得が先行していると考えられる。

こうしたことから語彙習得と活用変形規則の習得とはどちらが先とは言い難く、むしろ同時並行的になされているようである(このこと自体が余情的である)こと、さらにいえば動詞習得は語彙習得と活用変形規則習得が相互に補完しあいながらより完全な習得へと向かっているように見えるのである。また動詞の活用変形の規則が習得された後に、活用の変形規則と活用原形としての語彙のみが記憶に残り、それ以外の活用形はその2つ(活用の変形規則と活用の原形)によって作り出され、記憶からは消えると考え(最小主義)よりは、活用変形の規則とともにさまざまな活用形が実例として記憶能力の許容する限り記憶に残っていく(最大主義)という可能性のほうが大であると思われる。となるとまずもって普遍文法から派生して作り出される統語構造や規則に語彙があてはめられ、文が構成されると考える生得的な立場よりは、脳内には活用変形規則だけでなく、可能な限りさまざまな活用形も実例として記憶されており、動詞活用は、記憶内にあるル形やマス形がそのまま発話されることもあれば、活用変形規則から作り出される場合もあるとするLangackerらの主張がより妥当性を持つてくる。

しかし今回の調査だけではそのいずれかの有意を決定的に述べることは不可能である。今後学習者の中間言語をより細かく見ていきながら、言語習得のメカニズムがどのようになされるのか判断していかなければならない。

表4 動詞別中間言語

動詞	中間言語			
	ル	無答	マス	無答
起きる			おきります 3	
飲む	のみる 2			
洗う	あらぶ、わらう	2	あらべます、わらいます	2
磨く	ひかく	14	ひかきます、みかいます	14
履く	ぬぐ、ふく、つく、ひく	7	ぬぎます、はいます、ふきます、つきます、ひきます	7
着る	つく 3、きく 3、つくる、ふく	4	きります 4、つきます 3、つくります、ききます 3、ふきます、きります	4
来る	きる、きく		ききます	
行く				
乗る	のむ		のます	
降りる	おる 3、ふる 2、のぼる	3	おります、ふります 2、のぼります	3
帰る			かえます 2	
脱ぐ		8	ぬがります	8
見る				
書く	かう、きく	1	かいます 2、ききます	1
話す	はなする、はなす		はなします	
習う		3	ならわます	3
できる		4	できります 2	4
働く	つとめる 2、かける	6	つとめます、はたらきます 2、つとめます 2、かけます	5
遊ぶ	いそぐ	1	いそぎます	1
勤める	はたらく、ちかく、つとむ 2	10	はたらきます、ちかきます	10
住む	します、すう	1	すいます、すんできます	1
走る		2	はします	2
立つ	でる	7	でます	7
登る		2	のります	2
太る	ふたる	8	ふたります、ふとっています	7
痩せる	やする	12	やせります 6、やすいます	13
なる	ならう	3	ならいます	3
言う			いわます、いえます、います 3	
泣く		5	なります	5
捨てる	ひろう、ひらう	16	すてります、ひろいます、ひらいます	16
送る	おす、とどく	13	おします、おきます、とどきます	13
買う	さく		さきます	
待つ	でる、もつ	2	まてます、でます、もちます	2
死ぬ	しむ	3	しんます、します、しみます	3
食べる			たべります 2	
読む				
歌う	かう	2	かいます	2
歩く	あらう	4	あらいます	4
着く	きる 3、きく	8	つき、きます 2、きります、ききます	8
出る		2	でります	2
する				
置く	おる	5	おります	5
撮る	とつ、きつえいる	2	とちます、きつえいます、とます	2
教える	おしる、おくえる	2	おくえります	2
入る	はしる	2	はしります	2
泳ぐ	およぶ 2	1	およげます、およびます 2、およびます	2

寝る				
聞く	きる2		きます6、きいます	
押す	おしる、とす	12	おしります、とします	12
思う	かんがえる2	1	かんがえます2	1
あげる		8	あげります	8
弾く	うつ2	11	ひいます、うちます2	11
飛ぶ	とる2	2	とべます、とります2	2
生まれる	うまる3、いる、うまう	8	うまります、うまいます、うまえます	9
休む		1	やすみます	
切る		4	きます5、ききます	4
打つ		8		8
座る	すわす	6		6
叱る	しかう、ほめる	13	ほめます	12
誉める		14	ほめます5	13
降る	おりる、おる	2	おります2	2
吸う	さく、かう2、する、すぐ	1	さきます、かいます2、すぎます	1
咲く	なく	3	なきます	3
過ぎる	すぐ2、すごす2	7	すごします2、すぎます、すぎります	7
作る	つける、つくす	4	つけります、つけます	4
会う				
持つ	とむ	1	とみます	1
呼ぶ	よる、およぶ、ほぶ	5	およびます、ほびます、よみます	6

註) 数字は表出回数を示す。

◀ 参考文献 ▶

【韓国語資料】

- Langacker, R. W. (李基東, 金淙度訳) (1991b) 「認知文法」, 서울: 翰信文化社.
 Langacker, R. W. (金淙度訳) (1999) 「認知文法の土台 I」, 서울: 図書出版博而情.
 Langacker, R. W. (金淙度訳) (1999) 「認知文法の土台 II」, 서울: 図書出版博而情.

【日本語資料】

- 河上哲作(1996)「認知言語学の基礎」, 東京: 研究社出版.
 長友和彦(1997)「動詞テ形に関わる音韻規則の習得と言語の普遍性」『第二言語としての日本語の習得研究』1: 1-8, 第二言語習得研究会.
 森山新(1999a)「動詞活用形の習得順序について: ル形とマス形を中心として」『日語日文学研究』34: 453-482, 韓国日語日文学会.
 森山新(1999b)「第二言語習得の歴史」『高大日語教育研究』3: 1-38, 高大日語教育研究会.
 森山新(1999c)「認知的観点から見た第二言語習得に関する実験的研究」, 同徳女子大学校大学院日語日文学科日本語教育専攻博士学位論文.
 山梨正明(1995)「認知文法論」, 東京: ひつじ書房.

【英語資料】

- Banno, E., and S. Komori (1989) "A Study of Japanese Acquisition Order" 『白馬夏季言語学会論文集』3: 60-73, 白馬夏季言語学会.

- Chomsky, N. (外池滋生, 大石正幸訳) (1998) 『ミニマリスト・プログラム』, 東京: 翔泳社.
- Dulay, H. C., and M. K. Burt (1973) "Should we teach children syntax?" *Language Learning* 23: 245-258.
- Langacker, R. W. (1988) "A usage-based grammar." *Topics in cognitive grammar*. Amsterdam, John Benjamins Publishing Company.
- Langacker, R. W. (1991a) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Bases of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruiter.
- Selinker, L. (1969) "Language transfer." *General Linguistics* 9: 67-92.
- Selinker, L. (1972) "Interlanguage." *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching* 10: 209-231.
- Selinker, L., M. Swain, and G. Dumas (1975) "The interlanguage hypothesis extended to children." *Language Learning* 25: 139-152.

